

日本語歴史コーパスを用いた複数接尾辞ドモの言語変化研究

平塚 雄亮 (中京大学)

1. はじめに

本発表では、『日本語歴史コーパス (CHJ)』を用い、古典語では特に平安・鎌倉期を中心に無生名詞にも後接する生産的な形式であった複数接尾辞ドモが、時代を追うにつれて無生名詞には後接しにくくなるという言語変化を示す。

以下、2 節で先行研究と本発表の目的についてまとめ、3 節では本研究の調査方法について述べる。4 節では CHJ を用いた通時的な用例を示し、ドモに起こった言語変化の様相を描く。5 節では 4 節での調査結果や先行研究をもとに、ドモおよび関連形式に起こった言語変化についての推測を立てる。6 節はまとめと今後の課題である。

2. 先行研究と本発表の目的

現代標準語では複数¹をタチ、例示²をナドやナンカで標示するが、古典語のラ (小柳 2006 ; 2008) や現代近畿方言などにみられるラ (上林 2017 など) には、複数と例示の機能が認められる。本発表が対象とするドモもラと同様に複数と例示を表し、現代語ではラが近畿などに、ドモが九州にというように、地理的な相補分布をなしている³ (平塚 2021)。

一方で小田 (2015 ; 2020) は、ドモは古典語において最も一般的な複数標示形式であり、有生名詞にも無生名詞にも用いられると指摘している。(1) は無生名詞「木」にドモがついた例である。

(1) そのあたりに、照り輝く木どもも立てり。(竹取)

これはつまり、ドモを用いることで、古典語においては現代語ではなされない無生名詞の複数標示がなされていたということである。しかし、古典語において無生名詞の複数標示そのものが一般的であったかどうかについては、まだ議論の余地があると思われる。なぜなら、複数専用形式であるタチを CHJ で検索してみても (5,538 件)、その用例自体は奈良時代からみられるものの、明らかに無生名詞に後接していると言える用例はみつからないからである (小田 2015 ; 2020 もタチは人間名詞のみに用いられるとしている)。

以上のことから、ドモが無生名詞の複数標示を行わなくなってきたのはいつ頃なのかということが疑問点として挙げられる。しかし、有生名詞であれ無生名詞であれ、書きこと

¹ 本発表では、新永 (2020) の言う累加複数 (英語の s が表すような同質な対象の集合) および連合複数 (異質な対象の集合) をまとめて「複数」と呼ぶことにする。

² 本発表では、現代標準語でナドやナンカなどが表すような、個別例を挙げて集合を表したり (「魚などを食べた」)、否定的に 1 つの対象を表したりする (「私なんかでいいの?」) ものをまとめて「例示」と呼ぶことにする。

³ ただし、これらの方言においてナドやナンカのような例示専用形式がどのように発達し、また使用されているのかは明らかではない。

ば（CHJ）に現れるドモが複数を表しているのか、それとも例示を表しているのかの判断は非常にむずかしい。そこで、本発表ではまず、ドモが有生名詞についているのか、それとも無生名詞についているのかという数量的なデータを示していく。

3. 調査方法

CHJに現れたドモ⁴に前接する要素を、人称代名詞（1／2／3 人称）、親族名詞・固有名詞、人間名詞、動物名詞、無生名詞（自然の力名詞、抽象名詞・地名）に分類した（用語は角田 2009 による）。ただし、本発表では原典の現代語訳などではなく、コーパスの前後の文脈のみを頼りに分類を行っているため、現段階では相当数の分類の誤りが含まれている可能性がある。

4. 調査結果

2021 年 3 月 26 日現在、CHJ のデータバージョンは 2020.3 であるが、本発表の調査結果はバージョン 2019.11 にもとづいている⁵。このバージョンの CHJ に現れるドモの調整頻度（100 万語あたりの語数）を示すと、表 1 のようになる（小数点以下は切り捨て）。

表 1 時代別のドモの使用頻度

時代	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	明治・大正	合計
調整頻度 (用例数)	292 (29)	2,329 (2,360)	2,237 (2,176)	1,376 (572)	38 (34)	80 (1,221)	- (6,392)

この表から、ドモは平安期・鎌倉期に盛んに用いられたのち、室町期・江戸期には使用頻度が極端に低くなっていることがわかる。明治・大正期にはわずかながら使用頻度が高くなっているようにみえるが、これは CHJ の明治・大正期が雑誌・教科書の書きことば中心であるという資料的性質が影響していると考えられる（4.6 節で詳述）。続いて、各時代のドモが有生名詞（黒）／無生名詞（白）についての割合を示す（分類不明のものは除いた）。

グラフからわかるように、無生名詞の割合は平安期から明治・大正期にかけて減っていることがわかる。2 節で述べたように、無生名詞の複数標示そのものがかつて盛んに行われていたかどうかは議論の余地があるが、少なくともこのデータから、長い時間をかけてドモは無生名詞にはつきにくくなるという変化が起こったとは言える。以下、各時代の特徴を用例とともに簡単に述べていく。

⁴ 語彙素読みを「ドモ」にし、「品詞」の「小分類」を「接尾辞-名詞的-一般」にして得られたデータを対象とした。

⁵ バージョン 2020.3 と比較すると、奈良時代の宣命、江戸時代の近松浄瑠璃がない。

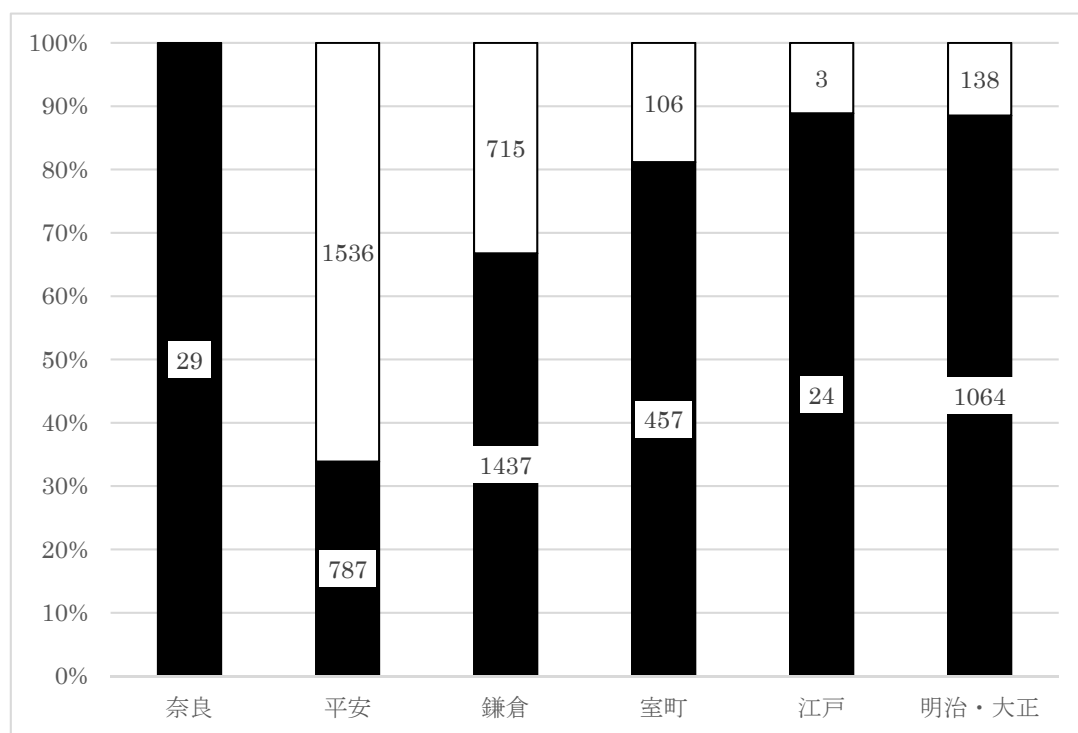


図1 各時代のドモの前接要素 (黒：有生名詞／白：無生名詞)

4. 1. 奈良期

この時代のドモの用例は少ないものの、29例すべてが親族名詞か人間名詞に接続している（以下、各時代の表中の有生名詞の用例数はカッコ内に示す）。

表2 奈良期の用例数

有生名詞 (29)				無生名詞
人称代名詞	親族・固有名詞	人間名詞	動物名詞	
0	2	27	0	0

(2) いざ子ども早く日本へ大伴の三津の浜松待ち恋ひぬらむ【10-万葉 0759_00001, 30510】

(3) 妻子どもは乞ふ乞ふ泣くらむこの時はいかにしつか汝が世は渡る【10-万葉 0759_00005, 39080】

4. 2. 平安期

平安期はドモの使用数が非常に多く、2,360例がみられた。後述するように、現段階で「不明」としたものを37例含み、表中の数には含んでいない。また、25例は前後の文脈だけでは判断できなかった。

表 3 平安期の用例数

有生名詞 (787)				無生名詞
人称代名詞	親族・固有名詞	人間名詞	動物名詞	
0	56	694	37	1,536

表 3 のとおり、平安期では有生名詞よりも、むしろ無生名詞のほうにドモがよく使われていることがわかる。無生名詞のなかでは、「気色」、「琴」「御衣」、「事」などの用例が多い。特に「事」は用例数が多く、467 例みられた。

(4) これらは、文字の数も定まらず、歌のやうにもあらぬことどもなり。【20-古今 0906_00001, 3330】

また、37 例ではあるが、動物名詞に対してもドモが使われている。

(5) 馬どもなど、ふさにひき散らして騒ぐ。【20-蜻蛉 0974_00006, 73900】

4. 3. 鎌倉期

鎌倉期にもドモの使用は多くみられ、2,176 例が得られた。ただし、4.2 節で述べた平安期同様、24 例は「不明」に分類し、表には含んでいない。

表 4 鎌倉期の用例数

有生名詞 (1,437)				無生名詞
人称代名詞	親族・固有名詞	人間名詞	動物名詞	
5	55	1,308	69	715

平安期からの大きな変化としては、人間名詞が増え、逆に無生名詞が減っていることがわかる。これにより、平安期には無生名詞に多く使われていたドモは、この時代に有生名詞に対してより多く使われるようになったということになる。

(6) 色極て青き者共瘦せ枯たる、多く臥せり。【30-今昔 1100_11011, 15290】

4. 4. 室町期

室町期には人間名詞、無生名詞がともに大きく減っている（「鬼」「天狗」は動物名詞とした）。「勢」など 9 例は不明とした。

表 5 室町期の用例数

有生名詞 (457)				無生名詞
人称代名詞	親族・固有名詞	人間名詞	動物名詞	
1	40	370	46	106

4. 5. 江戸期

江戸期はドモの使用例そのものが激減している⁶。一人称代名詞「私」「わっち」に後接する例が現れる。

表 6 江戸期の用例数

有生名詞 (24)				無生名詞
人称代名詞	親族・固有名詞	人間名詞	動物名詞	
7	2	14	1	3

4. 6. 明治・大正期

最後に明治・大正期では、1 人称 537 例、2 人称 5 例、3 人称 13 例と、人称代名詞に後接する例が激増する。

表 7 明治・大正期の用例数

有生名詞 (1,064)				無生名詞
人称代名詞	親族・固有名詞	人間名詞	動物名詞	
555	38	413	58	138

依然として無生名詞（「事」など）に後接する例が存在するが、4 節の冒頭で述べたとおり、この時代の CHJ のサブコーパスが雑誌・教科書という書きことば中心であるという資料的制約によるところが大きいと考えられる。今回はこの時代の口語的な資料について調査を行えなかったが、たとえば明治・大正期の東京落語の速記資料をみると、ドモは人称代名詞など、有生名詞にしか後接しない（森勇太氏、私信）。

5. ドモおよび関連形式にみられる言語変化に関する一考察

前節では、ドモが鎌倉期を境に、時代を経るごとに使用頻度が下がり、かつ前接要素が有生名詞に限定されていくようすについて明らかにした⁷。コーパスの用例という数量的なデータから言えることには限界があるため、ここから先は用例を細かくみていく必要があるが、本発表では最後に、先行研究と現代方言のデータから推測できることをまとめておきたい。

小柳（2019）によると、ナドが現れる 10 世紀初め以前には、例示を表す助詞はなかったという。2 節で述べたとおり、ドモやラが複数と例示の両方の機能を担っていたことになるが、10 世紀初めからナドなどの例示専用形式が発達してきたことと、鎌倉時代を境

⁶ 室町期に 116 例だったタチは、江戸期には 205 例になっているため、ドモ以外の形式が複数を標示するようになったことや、そもそも複数標示自体が少なくなった可能性が考えられる。

⁷ 平塚（2021）は、ドモは九州方言においてはいまだに無生物に盛んに後接することを示している。ただし、このときは複数ではなく例示を表していると考えられる。

にドモが無生名詞に後接しにくくなってきた⁸ことは無関係ではない可能性がある。つまり、この時代から複数をドモやラが、例示をナドなどが表すような機能分担が起こり始めていたのではないかと考えることができる。

しかしその一方で、現代九州方言ではドモが、いまだに複数と例示の機能を有しているという事実がある。中央語では例示の機能を失い、かつ使用頻度が下がり非生産的になってしまったドモは、九州でのみかつての姿をとどめるようになっていると言える。

6. まとめと今後の課題

以上、本発表では CHJ を用い、古典語では特に平安・鎌倉期を中心に無生名詞にも後接する生産的な形式であった複数接尾辞ドモが、有生名詞にしか後接しにくくなるという言語変化を示した。今後は、5 節で述べたように、ドモ、ラ、さらにはタチの使用実態について、時空間変異を対象にして言語変化を描いていく必要がある。

使用コーパス 本研究のデータは、国立国語研究所『日本語歴史コーパス』（データバージョン 2019.11 および 2020.3）https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/を利用した。

参考文献 小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』和泉書院。／———（2020）『古代日本語文法』ちくま学芸文庫。／上林葵（2017）「関西方言における接尾辞「ラ」」『阪大社会言語学研究ノート』15, pp.59-71, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室。／小柳智一（2006）「上代の複数：接尾語ラを中心に」『萬葉』196, pp.35-51, 萬葉学会。／———（2008）「複数と例示—接尾語ラ追考—」国語語彙史研究会（編）『国語語彙史の研究』27, pp.147-164, 和泉書院。／———（2019）「日本語のとりたて表現の歴史」野田尚史（編）『日本語と世界の言語のとりたて表現』pp.41-58, くろしお出版。／角田太作（2009）『世界の言語と日本語（改訂版）』くろしお出版。／新永悠人（2020）「北琉球奄美大島湯湾方言の名詞・代名詞複数形の機能とその通言語的な位置づけ」『言語研究』157, pp.71-112, 日本言語学会。／平塚雄亮（2021）「日本語諸方言コーパスを用いた複数接尾辞の対照方言研究」シンポジウム：日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言の対照研究を中心に—（第1回）配布資料。

付記 CHJ の利用にあたり、宮内佐夜香氏（中京大学）、森勇太氏（関西大学）の助言を得た。記して感謝申し上げます。また本研究は、JSPS 科研費「『全国方言文法辞典』データベースの拡充による日本語時空間変異対照研究の多角的展開（20H00015）」の研究成果の一部である。

⁸ ラについても、ドモと同様の言語変化があるのかどうかをたしかめる必要があるが、現代標準語におけるラのふるまいを考えると、少なくとも無生物名詞には後接しないことから、ドモと同じ変化をたどった可能性は十分に考えられる。